

平成29年度

入学試験問題

国語

※試験開始のチャイムや合図があるまで開かないこと

〔注意事項〕

1. 問題用紙は、10ページまでである。
2. 解答は、すべて別紙の解答用紙の所定欄に記入すること。
3. 解答用紙への記入は、試験開始後に記入すること。
4. 解答用紙には出身中学校・受験番号・氏名を必ず記入すること。
5. 試験開始の30分後から退場はできるが、解答用紙は必ず裏返して退場すること。
6. 問題用紙は、各自で持ち帰ること。

常磐高等学校

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

どんな人にも必ずチャンスとピンチの場面が訪れます。交互にやって来るわけではありませんが、どちらも大切な瞬間なのでいかにチャンスを掴んで、いかにピンチを凌ぐかによって結果は大きく変わってしまいます。

チャンスとピンチに強いが弱いかは、もちろんその人の実力や性格とも関連していると思いますが、年代によってもかなり違うような気がします。

一般的に若い時にはチャンスに強く、ピンチに弱い、年齢を重ねるとチャンスに弱く、ピンチに強くなる傾向があるのではないのでしょうか。チャンスというのは長い時間は続きません。その瞬間を大胆に捕まえないとすぐに逃げてしまいます。

「石橋を叩いて渡る」では、とてもではありませんが間に合わないのです。

若くて勢いがある時のほうがチャンスは捕まえやすいわけです。一方でピンチの場面を迎えた時は、経験が少ないこともあって対処に困るケースもあります。チャンスを掴む時のように大胆な選択をしましょうと、かえって傷を深めて收拾がつかなくなりそうです。

そして、年齢を重ねてくると、ピンチの場面を迎えた時に経験に基づいてどんな状況になっているのか、そこからどんな手段で抜け出せるのかを客観的に見るようになります。

しかし、現状を冷静に見ている間にチャンスが通り過ぎることも増えてくるわけです。

また、経験のきおくの性質として、チャンスの時よりピンチの時のほうが深く刻み込まれます。どうしてもピンチを回避するほうを優先するので、チャンスが掴みにくくなる面もあるでしょう。

私も今まで数多くの対局でたくさんさんのチャンスとたくさんさんのピンチを迎えました。

初めてタイトルを獲って翌年に負けたらタイトルを失うカド番を迎えた時はそれまでに経験したことのないプレッシャーを感じました。もちろん、数多くの経験をしていく中で慣れる部分もあります。

以前、一年間で十回くらいカド番を迎えたこともありました。

「一難去つてまた一難」というところでしたが、少しずつプレッシャーにも麻痺していくような感覚もありました。

ベストの状況でピンチを迎える時には少しプレッシャーも必要だと思えます。

プレッシャーを感じながらも腹が据われれば、状態はととのつたと言えるのではないのでしょうか。ピンチの後にチャンスが、チャンスの後にピンチがいつもやってくるわけではありませんが、ピンチをきちんと凌げば、あるいはチャンスをみすみす逃せば、逆の日が来やすくなる可能性は高いです。

いずれにせよ、どんな場面においてもできる限りのことをやってみるのが、大切だと思います。

チャンスとピンチはコインの裏表のような関係でもありますが、偶然性が入ると少し違うような気もしています。つまり、偶然チャンスが訪れることはあっても、偶然ピンチが訪れることはないということ。

ピンチが訪れた時は何かしらの原因があると考えたほうがいいと思っています。
それが本当かどうかは証明できませんが、ピンチの芽を摘むために必要な考え方ではないでしょうか。

(羽生善治『迷いながら、強くなる』による。一部改変)

問一 本文中の きおく と とのった に適切な漢字をあて、楷書で書け。なお、送り仮名が必要なものは、平仮名で正しく送ること。

問二 本文中の 必ず の品詞と、傍線部の品詞が同じものを次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

- 1 授業中は静かにするように。
- 2 彼は作業に取りかかるのが早い。
- 3 たくさんの人が参加した。
- 4 きつと彼女は勝ってくれる。

問三 本文中に 若い時にはチャンスに強く、ピンチに弱い とあるが、これを説明した次の文章の空欄 ア ・ イ に入る最も適当な二字の語句をそれぞれ本文から抜き出して書け。

ア のある若い時のほうがチャンスを掴みやすいので、チャンスに強いと言える。一方で、イ の不足から対処に困ることもあるため、ピンチに弱いと言える。

問四 本文中の 石橋を叩いて渡る ということわざに、最も意味内容が近いものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

- 1 暖簾に腕押し
- 2 転ばぬ先の杖
- 3 危ない橋を渡る
- 4 諸刃の剣

問五 本文中の 一難 とあるが、本文中での著者にとっての「一難」とはどのようなことか。九字の語句を本文中からそのまま抜き出して書け。

問六 著者が考える、本文中でチャンスの場面でもピンチの場面でも大切なこととは何か。解答欄の下の語句に続く最も適当な十四字の語句を、本文中からそのまま抜き出して書け。

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。句読点等は字数として数えること。

薬の壺に御文添えて参らす。広げて御覧じて、いといたく、あはれがらせ給ひて、物も聞こし召さず。御遊びなどもなかりけり。大臣・上達部を召して、「いづれの山か天に近き。」と問はせ給ふに、ある人奏す、「駿河の国にあるなる山なむ、この X も近く、Y も近く侍る。」と奏す。これを聞かせ給ひて、

逢ふことも涙に浮かぶ我が身には

死なぬ薬も何にかはせむ

かの奉る不死の薬に、文・壺具して、御使ひに賜はす。勅使には、調のいはがさといふ人を召して、駿河の国にあるなる山の頂に持て行くべきよし仰せ給ふ。峰にてすべきやう教えさせ給ふ。御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。そのよし奉りて、兵どもあまた具して山へ登りけるよりなむ、その山をばぶじの山とは名づけける。その煙、いまだ雲の中へ立ち昇るとぞ言ひ伝へたる。

『竹取物語』による。一部改変

(注) 大臣：政務を執る高官 上達部：政務を執る三位以上の役職。公卿の異称。 あはれがらせ給ひて：帝が、しみじみとかなしく思われて

物も聞こし召さず：食事も召し上がらないで 御遊び：音楽の催し 奏す：帝に申し上げる 駿河の国：現在の静岡県

勅使：帝の命令をうけた使者

問一 本文中の X・Y にはそれぞれ漢字一字が入る。その漢字の組み合わせとして最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

4	3	2	1
<input type="checkbox"/> X	<input type="checkbox"/> X	<input type="checkbox"/> X	<input type="checkbox"/> X
都	都	国	国
<input type="checkbox"/> Y	<input type="checkbox"/> Y	<input type="checkbox"/> Y	<input type="checkbox"/> Y
天	海	山	川

問二 本文中の 何にかはせむ の読み方を、すべて現代仮名遣いに直し、平仮名で書け。

問三 次の□の中の文章は、本文中の「駿河の国にあるなる山の頂に持て行くべきよし仰せ給ふ」についてその理由をまとめたものである。空欄□に入る内容を、十字以上、十三字以内の現代語で考えて書け。

帝は、調のいはがさという者に御文と薬の壺の処理を命じている。その理由は、かぐや姫に会えないのなら、□からということであった。

問四 本文中に「ふじの山とは名づけける」とあるが、山の名の由来になった事柄の一つは、不死の薬壺をこの山で燃やしたことであるが、もう一つの事柄を十字以上、十五字以内で抜き出して書け。

問五 次の□の中の文章は、本文の内容を整理したものである。空欄□アに入る最も適当な四字熟語を、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。また空欄□イ・ウに入る語句を、イは二字、ウは四字で本文中から抜き出して書け。

- 1 意気消沈
- 2 驚天動地
- 3 一喜一憂
- 4 疑心暗鬼

帝の感情	かぐや姫がいなくなって□アしている。
命令	「山の頂で□イと□ウの入った壺を燃やせ。」
命令の意図	昇天したかぐや姫に、帝の思いを煙となって届かせる。

次の文章を読んで、後の各問に答えよ。

【ここまでのあらすじ】「ぼく」は信州の病院で働く勤務医。医療現場の現実に失望して、仕事に生き甲斐を見出せなくなり漫然と日々を送っている。そんな「ぼく」の心のすき間を満たしてくれるのは釣りだった。ある日、医長から難民医療団への参加を打診され興味をそそられるが、その場では尻込みしてしまう。そして待ちに待ったアユ漁の解禁の日がやってくる。

解禁の日は朝からよく晴れていた。七時に打ち上げられた開始の合図の花火の音を、ぼくは寢床の中で聞いた。九時に起き、十時を過ぎてようやく川に向かった。生後三ヶ月の次男を抱いた妻と、三歳の長男も車に乗った。

八ヶ岳と浅間山を結ぶ直線を通る川の両岸には、五メートルほどの間隔でぎっしり釣り人が並んでいた。ぼくはかねて下見をしておいた上流の橋の下に向かった。予想通り、流れの速いこの付近にはめずらしい、底が岩盤になっている深い淵の両岸だけは釣り人の姿がなかった。橋の下の急な瀬が流れを休めるその淵は、三メートル近い深さなので、オトリを用いる友釣りには適さないのである。

ぼくは岸の岩場に立つて八メートルの長竿を出し、濃い緑色によんでいる淵に毛針を沈めた。竿をゆるやかに上下させていると、急に竿先がブルツと震え、一気に抜き上げると、夏の陽を受けてうすい緑色に輝く型の良いアユが釣れていた。やはり毛針でも釣れるのだ！ぼくは胸の裏からこみ上げてくる笑いを抑えられなかった。

アユ釣りといえば、オトリをひかせた針に野アユを引っかける友釣りが常識になっているこの土地で、ぼくは今年からあえて毛針釣りに挑戦した。そんなことしかぼくには挑むものがなかったからだ。この一年間、釣りに関する多くの本を読み、雑魚を釣りつつ川を見て、この淵なら、とねらっていたのだ。このことは、釣り好きの同僚にも内緒で通してきた。

アユは釣れ続けた。入れ食いであった。自分で針をはずす時間さえ惜しく思えてきたので、岩場の上にいる妻を呼び、抱いていた次男を背負わせて針をはずさせた。

午後になっても、同じ場所で、同じ間隔で釣れてきた。

陽が八ヶ岳連峰の端の、一段高い赤岳に沈みかけた頃、友釣りをやめた釣り人たちがぼくの周りに寄ってきた。ぼくが釣り上げるたびに、ほおつ、という吐息が彼らの口からもれた。

「こうなりやあ、かあちゃんに夕めし作ってきてもらっても釣り続けるだなあ。こんなこたあめつたにねえもんだ」

土手で草を刈っていたおじいさんが下りてきた、初めて見らあ、こんな大釣りは、と、あたりにふれるような大声で言い、ぼくの汗のじんだTシャツの背をたたいた。

浅瀬で水遊びに飽きた長男が、家に帰りたい、と泣き出した。妻は夕食の時間を気にした。ぼくはすべてを無視し、憑かれたように釣り続けた。

高く釣り上げたアユの向こうに、妙に赤っぽい月が出た。

丸い光の中央で、流線型の黒い魚影が大きくはねた。竿が急に軽くなり、体中の力が抜けた。ぼくはそのまま岩場にへたり込んでしまった。

タバコを吸おうとしたが、竿を握りつばなした指は熊手のようになつたまま開かず、ライターを着火させることすらできなかった。見かねた妻が、火をつけてくれたが、細いライターの火に照らされた彼女の手は、びっしりこびりついたアユのウロコで銀色に光っていた。

家に帰り、缶に入れていたアユをステンレスの流しにあげて数えてみると百三十一匹いた。大きな方から十匹ずつ選んで、竹細工の皿にのせ、妻に近所へ配らせた。

風呂を出ると、妻が作ったアユの塩焼きとカラ揚げを縁側に持ち出して食らいながら、冷えたビールを飲んだ。川の方から涼しい風が吹いて、軒下の南部鉄の風鈴を鳴らしていた。

次男を寝かしつけた妻は長男を連れて庭に出て、線香花火を始めた。ぼくは縁側に横になって、半分目を閉じながらそれを見ていた。

「お父さんも、ほらあ」

長男が最後の一本になった線香花火をぼくに握らせた。

妻がマツチに火をつけた。ぼくは腹ばいになって縁側から身を乗り出し、花火を見た。鋭い火花が散るたびに、長男は手をたたいた。やがて花火は消え、くすぶつた赤い玉が残った。竿を握っていた手にはまだ細かな震えが残っており、赤い玉はすぐに乾いた土の上に落ちた。古い板塀に囲まれた小さな庭が、急に思いがけない暗さになった。闇の中から、長男の C。

「タイに行く。難民医療団に入る」

ぼくは腹ばいになったまま妻に言った。

彼女は膝をかかえてうずくまったまま、いつまでも顔を上げなかった。

その夜、医長へ電話した。

医長は、

「出発は十日後だぞ」

と、言った。

(南木佳士「冬への順応」による。一部改変)

問一 本文中の 抑え 吐息 の ―線を施した漢字の読みを、平仮名で書け。

問二 本文中の 飽 を楷書で書いた場合の総画数と、行書の漢字を楷書で書いた場合の総画数が同じものを次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

- 1 寝
- 2 買
- 3 駅
- 4 陶

問三 本文中に そんなことしかぼくには挑むものがなかった とあるが、このときの「ぼく」の説明として最も適当なものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

- 1 妻と幼い子供たちに、一家の主としての威厳を示すことができるのはアユ釣り以外にないと、かたくなに信じている「ぼく」の信念がうかがえる。
- 2 我を忘れて没頭できることが釣り以外ほかには何もない中で、実践と研究の末に確かな結果を出すことに大きな喜びをおぼえる「ぼく」の性質がうかがえる。
- 3 思うように小さな子供たちや妻と良好な関係を築くことができず、仕事にも行き詰まり、釣りに逃げ道を求めるしかない「ぼく」の深い苦悩がうかがえる。
- 4 地域の人々の中に自分がうまく溶け込んでいるか自信が持てない状態だったが、釣りを契機に親しい付き合いができるようになった「ぼく」の喜びがうかがえる。

問四 本文中の ～ に入る文を一つずつ選んだとき、いずれにも当てはまらないものが一つある。それはどれか。次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

- 1 中空に竿を止めて、ぼくは月を見た
- 2 おっとりとしたあくびが聞こえてきた
- 3 友釣りは不調だったらしい
- 4 医長の独言が聞こえてきた

問五 本文の読後感を話し合った文として、本文の内容に合致しないものを、次の1～4のうちから一つ選び、その番号を書け。

- 1 「長男はまだ幼くて釣りには全く興味を示していないけれど、父親のことは大好きなんだろうね。それが最後の一本の線香花火を父親に握らせたことからわかるだろ。」

- 2 「僕は主人公の置かれた状態がわかる気がする。行き場を失った夢や情熱が宙ぶらりんになって、それらがやむなく釣りや難民医療団に向けられている状態なんだよ。」
- 3 「私は奥さんがかわいそうだと思う。夫は一日中妻を振り回した拳句、タイに行くって言い出す始末だもの。夫に対して愛情がすっかり冷めているからいつまでも顔を上げなかったのよ。」
- 4 「釣りの場面では、主人公がアユをどんどん釣りあげて次第に気分が高揚していく一方で、すごく冷静な様子が読み取れるでしょ。最後は心身ともへとへとに疲れ果ててしまっけれど。」

四

「一郎さんと恵子さんは、環境問題を扱った授業を受けた。次は、【授業中の一場面】、【リサイクルに関する資料】、【リサイクル啓発のイラスト】である。これらを読んで、条件1から条件4に従い、作文せよ。」

【授業中の一場面】

先生 皆さんは、リサイクル啓発に効果的なイラストはどのようなものだと思いますか。

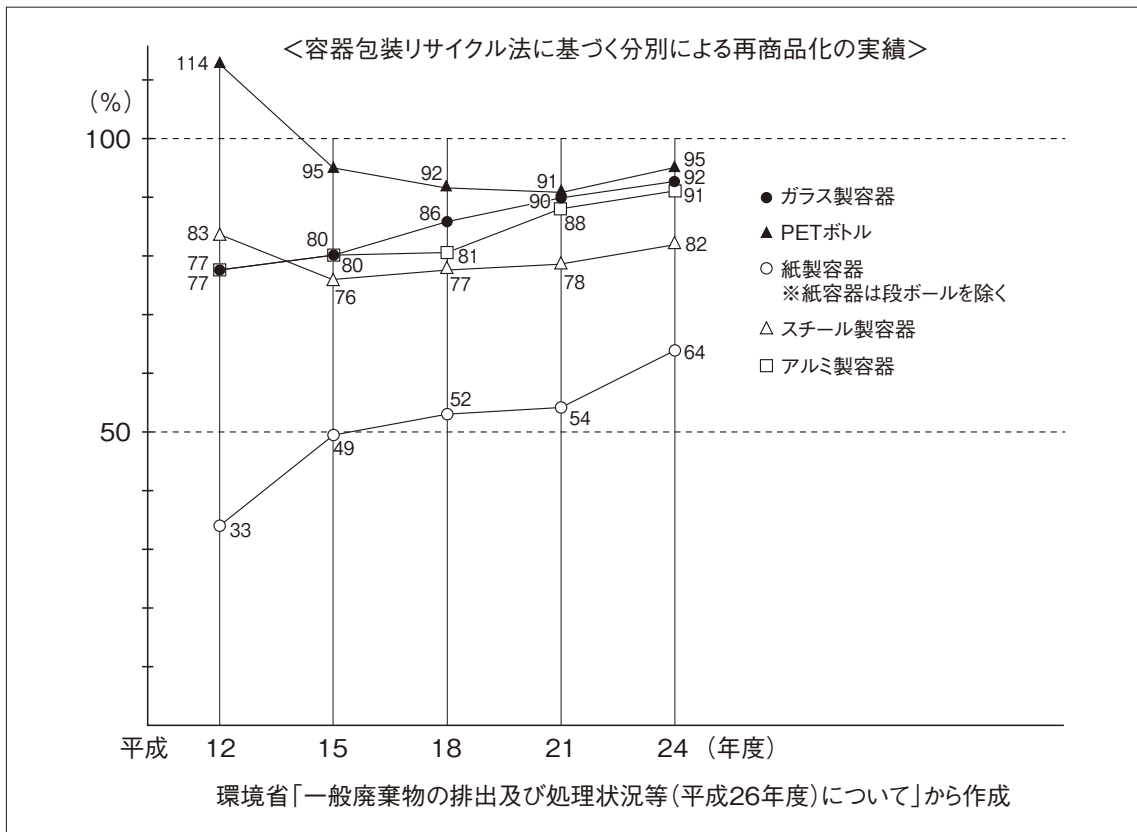
一郎 目的や行為が描かれたものだと思います。

恵子 何をするかが明確に表現されたものだと思います。

先生 どちらも大切なことです。この【リサイクルに関する資料】は、身近な資源の再商品化率を3年ごとにグラフ化したものです。しかし、分別収集量は下降傾向のものもあります。

この資料をもとに、【リサイクル啓発のイラスト】が描かれました。資源の再利用について様々な課題が読み取れますね。そのような課題の解決を図る上であなたならどうすることが最も効果的だと思いますか。

【リサイクルに関する資料】



【リサイクルのイラスト】



条件1 文章は、二段構成とすること。

条件2 第一段落には、【リサイクルに関する資料】をみて、リサイクルにおける分別収集について課題として挙げられることを一つ書くこと。

条件3 第二段落には、第一段落で挙げた課題の解決を図る上で、あなたならリサイクルのイラストをみて、どうすることが最も効果的だと考えるか、あなたの考えを理由とともに書くこと。

条件4 題名と氏名は書かず、原稿用紙の正しい使い方に従い、十行以上、十二行以内で書くこと。なお、数値を原稿用紙に書く場合は、左の例にならうこと。

例

20
%

